



# 日本植物病理学会ニュース 第51号

(2010年8月)

## 【名誉会員・永年会員の略歴とお話】

名誉会員 甲元啓介



1934年11月岡山県に生まれる。1953年岡山県立津山高校卒業後、鳥取大学農学部農学科を経て、1957年京都大学大学院農学研究科に進学、1960年同研究科博士課程を中途退学、日本曹達(株)生物研究所に勤務した。1968年鳥取大学農学部助手に採用され、同助教授を経て1981年教授に昇任、2000年定年退官した。この間、1976年に「リゾクトニア属病原菌毒素の生成に関する植物病理化学的研究」で農学博士(名古屋大学)を取得、1977年-78年文部省在外研究員として米国ミシガン州立大学に留学し、R. P. Scheffer教授の下で宿主特異的毒素の研究に従事した。また、北海道大学、名古屋大学、三重大学、岐阜大学、京都大学および島根大学の大学院農学研究科の非常勤講師を勤めた。鳥取大学名誉教授。2000年から(財)日本きのこセンター菌茸研究所顧問、研究所長などを勤め、現在に至る。学会活動：評議員、原著編集委員、関西西部会長。研究活動：日米科学セミナー(1981, 1986, 1990)、FAO/IEAE国際研究会議(1987, 1989, 1991)、NATO国際研究集会(1988)、国際植物病理学会(1983, 1988, 1993, 1998)、韓国植物病理学会(1986)、国際生化学・分子生物学会議(1994)、国際園芸学会梨シンポジウム(2000)で招待講演などを行った。また、宿主特異的毒素に関する鳥取大学国際シンポジウムを企画・主催(1988, 1993, 1997)した。受賞：発明協会総理大臣賞「農園芸用殺菌剤チオファネートの創成」(1976)、西村正暘先生と連名で日本農学賞・読売農学賞「植物病原糸状菌の宿主特異的毒素とその作用機構」(1988)、米国植物病理学会賞(Fellow)「アルターナリア属菌の宿主特異的毒素」(1995)。基礎研究の“種”は農業現場にあり、その成果は現場で

試されると思う。一連の研究展開には、恩師を始め多くの先輩や共同研究者のご指導・ご協力に負うところが大きい。このたび名誉会員に推挙されましたことは真に身に余る光栄です。改めて皆様に衷心よりお礼申し上げますと共に、世界の食料作物や資源植物の保護に深くコミットしている日本植物病理学会のさらなる研究深化と発展を祈念致します。

永年会員 久保 進



昭和9年12月16日愛媛県で出生。昭和32年九州大学農学部農学科を卒業後、同年4月日本専売公社(現JT)へ入社、秦野たばこ試験場、中央研究所、安全性研究所、本社勤務を経て平成2年3月退職。JT退職後(財)たばこ産業弘済会勤務となり、平成10年9月同財団を退職し現在に至る。九州大学では植物病理学を専攻し、ここで初めて植物ウイルスと出会い、その後ほぼ30年間ウイルス病に関する調査、研究に直接携わってきた。タバコという限られた対象分野であったが、問題となるウイルス病は普遍性のある重要ウイルスによるものが多く、また新種のウイルスとも遭遇し、同定、発生生態の解明、抗ウイルス剤を含めた防除法などの研究、開発に努めた。昭和46年「タバコモザイクウイルスの感染ならびに増殖に関する研究」で農学博士の学位を受け、昭和54年タバコモザイク病防除薬剤(商品名モザノン)の開発実用化で新技術開発財団より市村賞を共同受賞した。昭和61年には「タバコウイルス病に関する研究」で日本植物病理学会賞を受賞した。印象深いこととしては、昭和55年頃関東各地で新たに発生した病害がジャガイモ葉巻ウイルスと近縁のルテオウイルスの1種によること、このタバコえそ萎縮ウイルス(新称)がプロトプラストの系で汁液伝染性ウイルスと同じように扱えることなどを明らか

にし、アブラムシ永続伝染性ウイルスの諸性質の解明に貢献できた。また、昭和49年4月から1年間、日本学術振興会の日英科学者交換事業の一環としてスコットランド園芸研究所のB. D. Harrison博士のもとへ長期出張し、タバコ茎えそウイルスの研究にタバコプロトプラスト系を活用したことなどがある。

学会業務への関与は昭和53・54年度に渡辺實庶務幹事長のもとで庶務幹事を担当したに過ぎないのですが、この度永年会員へ推挙いただき光栄に存じております。将来に涉って世界規模の環境問題や食料問題を考えるとき、実学としての植物病理学の一層の進展を祈念してやみません。

#### 永年会員 野津幹雄



昭和9(1934)年4月5日島根県生まれ、昭和32年島根県立島根農科大学農学科卒業、同年4月名古屋大学農学部研究生、昭和34年4月島根県立島根農科大学研究補助員、昭和35年1月島根県立島根農科大学助手(作物学研究室)、昭和42年4月島根大学農学部助手(植物病理学研究室)、昭和47年7月島根大学農学部助教授、昭和48年4月島根大学大学院研究科担当、昭和59年1月島根大学農学部教授、平成元年4月鳥取大学大学院連合農学研究科教授併任、平成7年4月島根大学生物資源科学部教授、平成10年3月退職。

卒業実験でイネごま葉枯病菌分生胞子の構造に疑問を持ち名古屋大学で胞子の超薄切片を電顕観察し、隔膜の中央部に穴が存在し、隣接した細胞は原形質で連絡していることなどについて報告した(日植病報1959年, *Phytopathology*, 1960年)。作物学研究室では米質や塩害の研究を手伝った。その頃より *Rhizobium* によるマメ科の根瘤(日作紀事 vol. 36)、*Agrobacterium* による根頭がんしゅ病組織をはじめ、*Protomyces*, *Taphrina*, *Exobasidium*, *Aciculosporium*, *Gymnosporangium*, *Albugo*, *Sorosphaera*, *Synchytrium* 等による罹病組織細胞の状態や病原体の存在場所について電顕観察した。「植物菌瘻の電子顕微鏡的研究」で学位を取得した(東京農業大学)。このことについては第1回国際微生物連合会議で発表した(於帝国ホテル, 1974)。また観察した電顕像はまとめて「電子顕微鏡アルバム I. さび病菌, 1-290頁(1986)。同 II. マメ科の根瘤その他, 1-202頁(1987)」を作成した。個々の報文の内30数報の表題は *Review of Plant Pathology* に載った。退職して10年が過ぎた。昔、

卒業実験でイネごま葉枯病菌分生胞子の構造に疑問を持ち名古屋大学で胞子の超薄切片を電顕観察し、隔膜の中央部に穴が存在し、隣接した細胞は原形質で連絡していることなどについて報告した(日植病報1959年, *Phytopathology*, 1960年)。作物学研究室では米質や塩害の研究を手伝った。その頃より *Rhizobium* によるマメ科の根瘤(日作紀事 vol. 36)、*Agrobacterium* による根頭がんしゅ病組織をはじめ、*Protomyces*, *Taphrina*, *Exobasidium*, *Aciculosporium*, *Gymnosporangium*, *Albugo*, *Sorosphaera*, *Synchytrium* 等による罹病組織細胞の状態や病原体の存在場所について電顕観察した。「植物菌瘻の電子顕微鏡的研究」で学位を取得した(東京農業大学)。このことについては第1回国際微生物連合会議で発表した(於帝国ホテル, 1974)。また観察した電顕像はまとめて「電子顕微鏡アルバム I. さび病菌, 1-290頁(1986)。同 II. マメ科の根瘤その他, 1-202頁(1987)」を作成した。個々の報文の内30数報の表題は *Review of Plant Pathology* に載った。退職して10年が過ぎた。昔、

日本電子顕微鏡学会より「電子顕微鏡技術認定証」(1回目)を受けたことや日立の工場長より「大型電子顕微鏡の修了証」を頂いたことが印象深い。最後にお世話になりました皆様にお礼申し上げます、学会の発展をお祈りいたします。

#### 永年会員 吉野嶺一



昭和10年1月2日、大阪府生まれ。昭和34年東京大学農学部農学科卒業。同年4月農林省北陸農業試験場に採用。以後、農事試験場、農業研究センター、北陸農業試験場、農業研究センターにおいてイネ病害、主としていもち病の発生生態に関する研究に従事。その後東北農業試験場地域基盤研究部長、農業環境技術研究所環境生物部長を務め、平成7年3月定年退職。同年4月からゼネカ株式会社、シンジェンタジャパン株式会社にて農業開発のための調査、研究に従事。また、平成11年4月から15年3月、玉川大学農学部において客員教授として植物病理学、病害防除論の講義、指導を行う。平成17年7月、シンジェンタジャパン株式会社を退職。研究の原点は壊滅的な被害圃場が随所で発生した昭和51年の北陸地域での穂いもち広域大発生を経験したことにある。いもち病の発生予察を研究テーマとしていながら、周辺の圃場で起こっていた事態を予測できなかったことに大きな責任を感じ、その後は圃場と対話することを心がけ、圃場を情報収集や仮説検証の場としてきた。その結果、いもち病蔓延に侵入環境が重要な役割を演じていることが確認でき、籾いもち初期症状としての稈先の黄変、胞子形成に関して既存分生子柄上では未熟胞子は退化し日々新たに胞子形成が始まり、このことが分生胞子飛散の日周期性を担保していることなどを知りえた。しかし、穂部器官への菌の侵入速度、日変動が大きい胞子飛散数の予測、プータンで多く見られる葉節いもちの発生要因などは解明できずに終わった。疫学研究の分野でも、遺伝子情報の利用など新しい研究手法の活用が進んでいるので、これらの問題の近い将来の解明を期待したい。

その後東北農業試験場地域基盤研究部長、農業環境技術研究所環境生物部長を務め、平成7年3月定年退職。同年4月からゼネカ株式会社、シンジェンタジャパン株式会社にて農業開発のための調査、研究に従事。また、平成11年4月から15年3月、玉川大学農学部において客員教授として植物病理学、病害防除論の講義、指導を行う。平成17年7月、シンジェンタジャパン株式会社を退職。研究の原点は壊滅的な被害圃場が随所で発生した昭和51年の北陸地域での穂いもち広域大発生を経験したことにある。いもち病の発生予察を研究テーマとしていながら、周辺の圃場で起こっていた事態を予測できなかったことに大きな責任を感じ、その後は圃場と対話することを心がけ、圃場を情報収集や仮説検証の場としてきた。その結果、いもち病蔓延に侵入環境が重要な役割を演じていることが確認でき、籾いもち初期症状としての稈先の黄変、胞子形成に関して既存分生子柄上では未熟胞子は退化し日々新たに胞子形成が始まり、このことが分生胞子飛散の日周期性を担保していることなどを知りえた。しかし、穂部器官への菌の侵入速度、日変動が大きい胞子飛散数の予測、プータンで多く見られる葉節いもちの発生要因などは解明できずに終わった。疫学研究の分野でも、遺伝子情報の利用など新しい研究手法の活用が進んでいるので、これらの問題の近い将来の解明を期待したい。

#### 永年会員 丹田誠之助(執筆ご辞退)

### 【学会活動状況】

#### 1. 大会開催報告

平成22年度日本植物病理学会大会は4月18日(日)か

ら20日(火)まで、京都市の国立京都国際会館において開催されました。会期を通して天候にも恵まれ幸いでした。今年度は近畿地区の担当で、京都大学、京都府立大学、滋賀県立大学、京都府農林水産技術センター、滋賀県農業技術振興センターの植物病理学会会員が運営委員となり、プログラム編成と3日間の各講演会場の運営にご尽力いただきました。とくに大会幹事長の京都大学三瀬和之先生、プログラム委員長の京都府立大学久保康之先生をはじめとする先生方並びにご協力いただきました皆様方に心から感謝申し上げます。

今年度の大会も昨年に引き続き、口頭発表の他、ポスターセッション、課題別シンポジウムを開催いたしました。今年度は、講演申し込み数が413題(内ポスター234題)であり、例年並みでした。学生発表は学生優秀発表賞の選考の公平性を保つ観点から、昨年に引き続きポスター発表のみとしました。会場の広さやスケジュールを考慮し、ポスター発表を2回に分けて行いました。しかしながら、とくに初日に来場者が予想以上であったことに加え、換気等の不備もありご迷惑をお掛けしましたこと、また、1回あたりのポスター展示時間が1日しかなかったため必ずしも観覧・討議時間が十分ではなかったことをお詫び申し上げます。このような状況ではございましたが、会場に入りきれないくらいの盛況の中、熱心で活発な論議が交わされました。また、一般講演の他に「環境保全型農業を推進する病害防除技術の普及における課題と新たな展開」、「植物-微生物相互作用の分子解析の最前線」および「最近の*Pythium*属菌による病害の発生動向」の3課題で計16題のシンポジウムも行いました。大会参加者は名誉会員および永年会員のほか、ご招待したオーストラリア植物病理学会長Caroline Mohammed氏およびシンガポール植物病理学会長のSek Man Wong氏も含めて923名となり、昨年度を上回る参加者となりました。

本大会では初めての試みとして、演題をオンライン投稿のみで受け付けましたが、特に大きなトラブルもなくプログラム編成、要旨予稿集編集を無事、且つ迅速に行うことができました。また、大会の形式としましては一般口頭講演に加えて、昨年度の山形大会から導入されましたシンポジウムやポスターセッションを継承しましたが、2年目ということもあってスムーズに進行できました。これも講演者、座長の先生方および各会場の進行係の皆様のご協力のおかげと感謝しております。

懇親会は18日の夕刻、同会館内の宴会場で開催され、453名の会員の皆様に参加されました。京都府農林水産技術センター・生物資源研究センター長の小坂能尚氏の司会

によりまして、来賓の京都府の今西伸雄農林水産部長、京都大学の遠藤隆農学研究科長から歓迎のお言葉を賜りました。ついで、鏡割りのあと、京都大学名誉教授獅山慈孝大会名誉顧問の音頭で乾杯して開宴となりました。会場では京都府・丹後産のコシヒカリで作った特製おにぎりや新開発の米麴ドリンクをはじめ多くのお酒、料理がテーブルに並び、出席者の活発な意見交換や笑顔でのご歓談の中、会場は大いに盛り上がりました。会場の「さくら」に隣接した池の周囲には夜間照明に照らされた遅咲きの八重桜が参加者の皆様を歓迎するかのよう美しく咲き誇っていたのが印象的でした。

京都市での開催は1983年以来四半世紀ぶりのことであり、運営委員に開催経験者がおらず何かと苦労がありました。大会準備にあたっては、昨年にはじまり好評を博したポスターやシンポジウムの試みを踏襲し、さらに1000人規模の参加者の皆様をお迎えする会場の選定に苦労しました。結局、国立京都国際会館というすばらしい施設をお借りしての大会開催となったのでございますが、参加費の面におきまして例年よりも高額になってしまいましたことをお詫びいたします。また、施設の特性を生かし少人数の学生アルバイトで運営する試みとして、口頭発表の際の質問を移動式マイクでなくマイクスタンドでの質問という形式にさせていただきました。本学会では珍しい形式であったためご迷惑をお掛けしたことも多々あったことと存じます。併せてお詫び申し上げます。ただし、総会、講演会および懇親会を一つの建物内で行えましたことから、参加者の皆様方には快適にご参加いただけたものと思っております。最後になりますが、本大会を様々なところで支えていただきました、学会役員、評議員はじめ大会参加者の皆様、近畿京滋地区の会員の皆様さらに京都府農林水産技術センター、滋賀県農業技術振興センターの職員の皆様、京都府立大学、滋賀県立大学および京都大学の皆様にあらためて心から厚く御礼申し上げます。皆様、本当にありがとうございました。(奥野哲郎)

## 2. 研究会開催報告

### (1) EBC 研究会ワークショップ

研究会発足から6回目を数えるEBC研究会ワークショップ2010が、4月17日13時15分から17時まで、京都市左京区の京大会館で開催された。

第一部最初の講演は岡山県農林水産総合センターの川口章氏による「雨除け栽培で発生するトマトかいよう病の疫学的解析による伝染源の解明」で、トマトかいよう病について、病原細菌のDNAフィンガープリント法による個体

識別により、雨除け栽培下での非典型的病徴の発生実態に対し、数学的手法による発生個体の空間分布を明らかにして伝染源を適確に解明し、効率的な防除対策の構築を行った事例が示された。

次いで、岩手県農業研究センターの猫塚修一氏から「リンゴ斑点落葉病の夏期の多発生に関連するリスク要因の疫学的解析」との講演があり、医学分野での実施例の多く知られるコホート内症例対照研究により多発生要因を解析し、これに基づく防除適期予測と効果について発表が行われた。

佐賀県上場営農センターの田代暢哉氏からは「信頼性の高い研究結果を効率的に得るための調査個体数設定の重要性とその方法」と題して、無駄のない試験実施のために必要な個体数設定方法に関する説明が行われた。

休息を挟んで第二部は、住友化学(株)の石川亮氏からの「新規病害抵抗性誘導剤イソチアニルの防除特性」で幕を開けた。石川氏からはイネいもち病等に効果の高い抵抗性誘導剤であるイソチアニルについて、その防除特性と使用法の注意に関する報告が行われた。

最後の講演は農研機構九州沖縄農業研究センターの中島隆氏による「作物病害におけるレギュラトリーサイエンスとは—麦類赤かび病制御ガイドラインに基づく管理措置を例にして—」で、科学的知見と規制や行政措置の橋渡しとしての研究事例を取り上げ、その際の経験に基づく種々の貴重な提言が行われた。

以上の講演に対し活発な議論が行われ、例年にも増しての盛会のうちに本ワークショップを終了し、熱気をそのままに懇親会へと議論の会場を移し、来年3月の東京農工大学での再会を約して散会した。

本年は約120名という、本研究会発会以来の参加者を得ることができた。ここに、関係各位のご支援ご協力に対して心より大いに感謝申し上げる次第である。(根岸寛光)

## (2) 第11回植物病原菌類談話会

日本植物病理学会大会最終日の平成22年4月20日、京都テルサ(京都勤労者総合福祉センター)において第11回植物病原菌類談話会を大会開催地実行委員会の協力も得て開催した。学会の大会閉会式後の夕方、大会会場とは開催場所が異なるにもかかわらず、大学、公立の試験研究機関、独立行政法人、検疫機関、農薬や種苗会社、農業団体など、学生・研究者108名の参加があった。

今回の談話会では「植物病原菌類の新種設立の手順について—これであなたも名付け親《新種発表・新組合せのイロハ》—」というテーマにて、植物病原菌類の学名成立の基礎について講演が行われた。それぞれの講演題目と講演者は、「新種設立の命名規約上の基本ルール」田中和明氏(弘

前大学)、「新種の記載文の作成法について」中島千晴氏(三重大学)、「標本の作製と保存を行う意味」景山幸二氏(岐阜大学)、「菌株—新種・新組合せ提案の主役へ」佐藤豊三氏(農業生物資源研究所)、「スケッチなど新種設立への付帯情報の準備法」青木孝之(農業生物資源研究所)であった。

今回の講演は、国際植物命名規約のルールに従って植物病原菌類の新種が提案される手順に沿ったものであり、命名規約上の基本ルールの紹介に始まり、新種設立の要件とされる記載文の書き方、基準標本の設定とその意味、また、近年その重要性が増してきた培養菌株の保存とその意味、新種記載に通常添付される菌の形態写真や描画の準備方法について具体的な例を挙げて解説された。

植物病原菌類の学名は植物病理学関連分野では日頃からよく使用されているが、それがどのように決められ、どのように正式に世の中に受け入れられるようになるかなど、学名の成立の基礎について具体的な解説を受ける機会はなかなか見当たらない。今回の談話会をきっかけに、植物病原菌類の学名についてもその成立を含めてより身近に考えられ、議論されるようになる糸口となることを期待したい。

開催準備にあたってご支援頂いた大会事務局の方々に感謝いたします。来年度も植物病理学会大会にあわせて本談話会の開催を予定しております。(青木孝之)

## (3) 第10回植物ウイルス病研究会 =原点の再確認=

国立京都国際会館で盛会裏に終了した平成22年度日本植物病理学会大会の翌日(4月21日)、京都駅南に位置する京都テルサ(京都勤労者総合福祉センター)で150名を超える研究者・学生が集い、第10回植物ウイルス病研究会が開催された。開催を遡る三週間前には京都の春を祝うかのような三分咲きのサクラの花に、季節はずれの雪が積もる趣のある美景が垣間見える年だった。時折、氷雨に見舞われる肌寒い京都の春であった。

早いもので、本研究会は端緒から10回を経過した。本会は隔年開催であるから、約20年という長大な時間が流れたことになる。本研究会は、初代代表幹事を務められた都丸敬一先生の元、急速に進展する分子生物学と植物ウイルス研究、さらには遺伝子解析から探る作物のウイルス病防除と壮大な理念を抱き平成3年に羽ばたいた。第10回を迎える今回は、その原点ともいべき本会の理念を再確認すべく2つのテーマを設定した。第一部は「ウイルス感染により誘起される病徴の発現機構」、第二部では「海外侵入・新興・再興ウイルス・ウイロイド病」である。

第一部では、海外招待者を含め5名の演者に講演を頂いた。久保田健嗣氏(農研機構中央農研)には「トバモウイルスの感染によるタバコのモザイクパターン形成機構」に

ついて、TMV 感染後の上位葉に形成されるモザイク病徴の発達過程を解説して頂いた。大西純氏（農研機構野菜茶研）には「トマトモザイクウイルス L<sub>11</sub>Y 系統感染タバコ植物におけるクロロシス誘導」として、ウイルス感染後のクロロシス誘導について国際的先端事例の紹介も交えご講演を頂いた。海外からは Yang, Jun-Yi 博士（National Chung Hsing University〈国立中興大学〉, 台湾）をお招きし「βC1, the pathogenicity factor of TYLCCNV, interacts with AS1 to alter leaf development and suppress selective jasmonic acid responses」という演題でご講演を頂いた。Yang 博士は、植物分子生理学研究者として国際的に名高い Chua, Nam-Hai 博士（The Rockefeller University, 米国）の元で昨年7月までポスドクをされていた。Chua 博士と共同研究されている町田泰則氏（名古屋大学）のご紹介で来日して頂いた。ご講演では、一時、日本のトマト栽培を震撼させたトマト黄化葉巻ウイルスが引き起こす葉巻症状の分子発現機構について最近の知見を交えご紹介して頂いた。望月知史氏（大阪府立大学）には、「メロンえそ斑点ウイルスの複製酵素 p29 が誘起する「えそ」の発病機構」として、ウイルス感染により引き起こされるネクロシスの細胞レベルでの発生機構についてご紹介頂いた。小林括平氏（愛媛大学）は「CC-NBS-LRR 型抵抗性タンパク質によるトバモウイルス外被タンパク質認識と局部病斑形成」として、近年ピーマンから単離されたトバモウイルス抵抗性遺伝子がウイルスとの競演で引き起こす「えそ斑点」形成の分子メカニズムについて解説して頂いた。第一部では、植物病理学の根幹を成す「病徴」について掘り下げる演題構成であった。自然界には千種を超える植物ウイルスが存在するとされているが、それらウイルスが宿主植物に感染した際に引き起こす病徴はウイルス種毎に斯くも違う。植物病理学を志す学生の誰しもが大学の研究室で真っ先に対峙するこの現象に驚きと新鮮さを感じることであろう。そのウイルス毎に異なる病徴の発現過程が今、分子生物学の力で明らかにされようとしている。病徴発現の分子メカニズム（病気の原理＝「病理」）を説き明かすことで、ウイルス病の発症を食い止める術を見つきたい。

第二部では、国内の新規病害事例について4名の研究者からご講演頂いた。前島健作氏（東京大学）からは「本邦における plum pox virus の発生」と題して、昨年度に国内侵入が確認された特定重要病害の本ウイルス病について世界情勢も踏まえた国内状況をご報告頂いた。松下陽介氏（農研機構花き研）は園芸作物では我が国初となるウイロイド病について「トマト退緑萎縮ウイロイドの発生とその特性」としてご講演を頂いた。奥田充氏（農研機構九州沖縄農研）

からは「ウリ類退緑黄化ウイルスの同定と遺伝的特徴について」として本ウイルスの遺伝子構造や特徴をご紹介して頂いた。最後に、眞岡哲夫氏（農研機構北海道農研）からは、「ジャガイモモップトップウイルス—25年ぶりの再発生と防除戦略の基本的な考え方—」として本ウイルス病の診断・防除の現状をご報告頂いた。国際貿易や国内物流が隆盛を極める昨今、今後の我が国の植物防疫のあり方を関係者で思考する絶好の機会となった。周知の通り、我が国は食料の約6割を外国から輸入している。食料の大半を海外に頼っている我が国では、それに付随して人知れず侵入する新規病害、特に植物防疫上危惧される特定重要病害の対処は喫緊の課題である。今後も続くであろうこの難局を乗り越えていくためには、農水省行政部局、大学、地方自治体そして独法研究機関に所属する植物病理学のエキスパートが一体となった対処が必要である。我が国の農業生産・貿易に脅威となる特定重要病害等を水際で食い止めるためにより一層の連携が期待される。

最後に、本研究会で座長をご担当して頂いた増田税氏（北海道大学）、高橋英樹氏（東北大学）、三瀬和之氏（京都大学）、吉川信幸氏（岩手大学）、大島一里氏（佐賀大学）に敬意を表す。また、会場にお集まり頂いた皆様、本会の運営にあたってくれた（独）農研機構中央農業総合研究センター昆虫等媒介病害研究チーム並びに京都大学農学部植物病理学研究室の諸氏に心から感謝申し上げる。

（津田新哉）

#### （4）第20回殺菌剤耐性菌研究会シンポジウム

第20回殺菌剤耐性菌研究会シンポジウムは、大会終了の翌日、平成22年4月21日に京都テルサ（京都勤労者総合福祉センター）において開催した。年度初めの4月中旬開催で、何かと慌ただしい時節でありましたが、公的試験研究機関、大学、農薬メーカー、農業者団体など計120名（講演要旨のみを含む）の方の参加を得て、終日、熱心な講演、討議が行われた。

講演は計7題。最初に研究会の発起人の一人である農業環境技術研究所の石井英夫氏が「殺菌剤耐性菌研究会20年の歩み」と題して、発足から20周年を迎える研究会のこれまでの活動を振り返り、耐性菌に関する情報の普及や薬剤使用のガイドラインの作成など、今後の取り組みについて講演いただいた。

次いで、三重県農業研究所の鈴木啓史氏からは「三重県における灰色かび病菌の薬剤耐性菌マネジメント」として、施設野菜における灰色かび病の耐性菌対策およびそれを支える薬剤感受性のモニタリング活動をご紹介いただいた。鹿児島県農業開発総合研究センターの尾松直志氏からは

「チャ輪斑病における QoI 剤耐性菌の発生」として、県内の耐性菌の発生推移から QoI 剤の使用後、顕著に感受性が低下する事例をご報告いただき、ごく少数の耐性菌であっても、QoI 剤の使用を差し控えるべきとの提言がなされた。

高知大学の曳地康史氏からは「イネもみ枯細菌病菌の GyrA のアミノ酸置換は oxolinic acid 耐性とイネ体での生存適応に關与する」と題して、もみ枯細菌病の発生メカニズムから、DNA ジャイレースの活性阻害によるオキソリニック酸の作用機構、DNA ジャイレースのサブユニット GyrA の突然変異による耐性獲得機構などを総括いただいた。佐賀県上場営農センターの田代暢哉氏からは「カンキツ果実腐敗の防除における耐性菌問題とその対策」と題し、カンキツ果実腐敗の発生要因と防除の考え方、使用される殺菌剤と耐性菌対策、特にベンゾイミダゾール系薬剤とイミノクタジン酢酸塩液剤の両剤の併用散布による防除効果の向上をご紹介いただいた。

最後は、麦類赤かび病に関する話題提供 2 題が行われた。岐阜大学の須賀晴久氏から「麦類赤かび病におけるチオファネートメチル耐性化と伝搬機構の分子遺伝学的研究」として、DNA マーカーを用いた解析で本菌のチオファネートメチル耐性が、分生子や菌糸等によるクローン増殖とともに、耐性菌と感受性菌間の交配を通して新たな遺伝子型を持つ子う胞子で伝搬される可能性をご報告いただいた。また、株式会社クレハ総合研究所の堅石秀明氏からは「ムギ類赤かび病菌のメトコナゾールに対する感受性分布」として、由来を異にする様々なムギ類赤かび病菌におけるメトコナゾール感受性分布に差異はなく、感受性を異にする菌株に対してメトコナゾールが安定した防除効果を有することを ご紹介いただいた。(足立嘉彦)

### 3. 平成 22 年度大会学生優秀発表賞

受賞者を下記のように決定した。

荒添貴之（明治大農）ストレスおよび感染過程において誘導されるイネいもち病菌の体細胞相同組換え

濱田 聡（奈良先端大バイオ）活性型 OsRac1 は高分子量複合体 (Defensome) を形成する

姫野未紗子（東大院農）イネいもち病菌ウイルスに対して働く RNA サイレンシング機構に関する解析

星 朱香（東大院農）植物の形態を変える病原性因子「TENGU」

稲見圭悟（農工大院農）トマト萎凋病菌新型レース 3 では非病原力遺伝子 *SIX4* がトランスポゾンによって破壊されていた

柏 毅（農工大院農）キャベツ萎黄病菌はトマト萎凋

病菌レース 1 の非病原力遺伝子 *SIX4* を保持する

榎野友香（名大院生農）牧草共生菌 *Epichloë festucae* の低分子量 G タンパク質 Cdc42 の機能に関する研究

小島信子（東大院農）主要抗原膜タンパク質に対する抗体を用いたイネ黄萎病ファイトプラズマの検出

前島健作（東大院農）わが国に発生したウメ輪紋ウイルス (plum pox virus, PPV) の全ゲノム解読と系統解析

内藤良平（北大院農）JP-4 遺伝子型ジャガイモ疫病菌の遊走子う胞芽に対する温度の影響

西村幸芳（大阪府大院生環）野生株のキュウリモザイクウイルスはタバコ茎内の木部柔組織に存在する移行阻害を乗り越え効率的に全身感染する

大川篤史（宇都宮大農）*Carlavirus* 属の ORF6 タンパク質は核局在性を示すが過敏感反応様症状は *Nicotiana benthamiana* でのみ特異的に誘導する

### 【今後の学会活動予定】

#### 1. 第 4 回国際 O-CHA 学術会議

当学会後援の上記会議が、下記の通り開催されます。

日時：平成 22 年 10 月 26 日（火）～28 日（木）

場所：静岡県コンベンションアーツセンター「グランシップ」

静岡市駿河区池田 79-4

詳細：日本植物病理学会 HP をご覧下さい。

### 【会員の動静】

#### 1. 人事

##### (1) 大学関係

志村華子	H21. 9	北海道大学大学院 農学研究 院 園芸学研究室 助教
池上正人	H22. 3	[退職]東北大学大学院 農学 研究科 教授
日比忠明	H22. 3	[退職]法政大学 生命科学部 生命機能学科 植物医科学専 修 教授
奥田誠一	H22. 4	[採用]東京農業大学 農学部 植物病理学研究室 教授
濱本 宏	H22. 4	[採用]法政大学 生命科学部 植物医科学専修 教授
山岡裕一	H22. 4	筑波大学大学院 生命環境科 学研究科 植物寄生菌学 教授
有江 力	H22. 4	東京農工大学大学院 農学研 究院 生命農学部門 教授

- |               |        |   |   |        |  |
|---------------|--------|---|---|--------|--|
| 柿澤茂行          | H22. 4 | [採用]東京大学 農学生命科学研究科 植物医科学研究室 特任助教                | 野口雅子  | H22. 4 | 中央農研 病害抵抗性研究チーム主研(農環研 生物生態機能研究領域主研)              |
| 本橋慶一          | H22. 4 | [採用]東京農業大学 地域環境科学部 電子顕微鏡室 助教                    | 久保田健嗣   | H22. 4 | 中央農研 昆虫等媒介病害研究チーム研究員(九州沖縄農研暖地施設野菜花き研究チーム研究員)     |
| 露無慎二          | H22. 3 | [退職]静岡大学 創造科学技術大学院 植物病理学研究室 教授(H22.4より静岡大学特任教授) | 酒井淳一  | H22. 4 | 九州沖縄農研 暖地施設野菜花き研究チーム主研(東北農研大豆生理研究東北サブチーム主研)      |
| 平田久笑          | H21.10 | 静岡大学 農学部 植物病理学研究室 准教授                           | 富村健太  | H22. 4 | 果樹研 コンキツグリーンング病研究チーム主研(果樹研 コンキツグリーンング病研究チーム任期付研) |
| 高原浩之          | H22. 4 | 石川県立大学 生物資源環境学部 植物保護学研究室 講師                     | 鬼頭英樹  | H22. 4 | 東北農研 病害抵抗性研究東北サブチーム主研(東北農研病害抵抗性研究東北サブチーム任期付研)    |
| 野々村照雄         | H22. 4 | 近畿大学 農学部 植物感染制御工学研究室 准教授                        | 富高保弘  | H22. 4 | [採用]中央農研 昆虫等媒介病害研究チーム任期付研                        |
| 池田健一          | H22. 4 | 神戸大学大学院 農学研究科 細胞機能構造学研究室 助教                     | (3) 都道府県試験研究機関関係                                    |        |  |
| 小林括平          | H22. 4 | 愛媛大学 農学部(分子生物資源学教育分野) 准教授                       | 萩田孝志  | H22. 3 | [退職]道立北見農試 研究部長                                  |
| 水本祐之          | H22. 4 | 高知大学 総合科学系生命環境医学部門 植物工学研究室 助教(特任)               | 田中文夫  | H22. 4 | (地独)道総研 中央農試 病虫部長                                |
| 上運天 博         | H22. 3 | [退職]宮崎大学 農学部 食料生産科学科 植物病理学研究室 教授                | 竹内 徹  | H22. 4 | (地独)道総研 北見農試 研究部地域技術グループ 研究主幹                    |
| (2) 農水省関連独法関係 |        |   | 清水基滋  | H22. 4 | (地独)道総研 中央農試 病虫部予察診断グループ 研究主幹                    |
| 池田成志          | H21.10 | [採用]北海道農研 根圏域研究チーム主研                            | 安岡眞二  | H22. 4 | (地独)道総研 十勝農試研究部 生産環境グループ 主査(病虫)                  |
| 喜多孝一          | H22. 3 | [退職]北海道農研 生産支援システム研究北海道サブチーム長                   | 小倉玲奈  | H22. 4 | (地独)道総研 中央農試作物開発部 生物工学グループ 研究主任                  |
| 西村範夫          | H22. 3 | [退職]九州沖縄農研 暖地施設野菜花き研究チーム上席                      | 北畠国昭  | H22. 4 | 北海道後志農業改良普及センター 南後志支所 支所長                        |
| 竹中重仁          | H22. 4 | 農研機構本部 総合企画調整部 研究管理役(農研機構本部 総合企画調整部 研究調査チーム長)   | 池田 信  | H22. 4 | 北海道石狩農業改良普及センター 石狩北部支所 支所長                       |
| 石黒 潔          | H22. 4 | 中央農研 企画管理部長(中央農研 研究管理監)                         | 北海道試験場関係者について、上記を含め全員が道立農業試験場から地方独立行政法人 北海道立総合研究機構へ |        |  |
| 御子柴義郎         | H22. 4 | 東北農研 研究管理監(農研機構本部 総合企画調整部 研究管理役)                |   |        |  |

太田恵二	H22. 3	[退職]青森県病害虫防除所	宮本拓也	H22. 4	茨城県県南農林事務所 経営普及部門 技師
雪田金助	H22. 4	(地独)青森県産業技術センターりんご研究所 研究管理監	大谷 徹	H22. 4	千葉県農林総合研究センター暖地園芸研究所 果樹・環境研究室
岩谷香織里	H22. 4	青森県病害虫防除所	香川晴彦	H22. 4	千葉県農林総合研究センター暖地園芸研究所 野菜・花き研究室
赤坂安盛	H22. 4	岩手県沿岸広域振興局 宮古農林振興センター 所長	田中千華	H22. 4	千葉県農林総合研究センター病害虫防除課 南総支所
中南 博	H22. 4	岩手県農林水産部 流通課企画マーケティング 担当課長	横山とも子	H22. 4	千葉県農林総合研究センター生産環境部 病理昆虫研究室
富永朋之	H22. 4	岩手県農業研究センター 環境部 病理昆虫研究室 主任専門研究員	牛尾進吾	H22. 4	千葉県農林総合研究センター生産環境部 病理昆虫研究室 室長
猫塚修一	H22. 4	岩手県農林水産部 農業普及技術課 主任(技術環境担当)	吉田菜々子	H22. 4	千葉県農林総合研究センター生産環境部 微生物工学研究室
大野 浩	H22. 4	岩手県農業研究センター 技術部園芸研究室 主任専門研究員	鐘ヶ江良彦	H22. 4	千葉県農林総合研究センター暖地園芸研究所果樹・環境研究室
畑中教子	H22. 4	宮城県気仙沼地方振興事務所農林振興部 技師	竹内 純	H22. 4	東京都島しょ農林水産総合センター 八丈事業所 園芸振興係長
深谷富夫	H22. 3	[退職]秋田県農林水産技術センター 農業試験場 主席研究員	北 宜裕	H22. 4	神奈川県農業技術センター 企画調整部 部長
本田浩央	H22. 4	山形県生活環境部 危機管理・くらし安心局 食品安全対策課(病害虫防除所駐在) 主査 兼 病害虫防除所主任専門防除員	岡本昌広	H22. 4	神奈川県農業技術センター 農業環境研究部 主任研究員
菊地繁美	H22. 4	山形県エコ農業推進課 エコ農業推進専門員	片木新作	H22. 4	神奈川県農業技術センター かながわ農業アカデミー 校長
横山克至	H22. 4	山形県農業総合研究センター 食の安全環境部 開発研究専門員	室井義広	H22. 4	神奈川県農業技術センター 三浦半島地区事務所 普及指導課 副技幹
平子喜一	H22. 4	福島県農林水産部 循環型農業課 副課長 兼 主任主査	植草秀敏	H22. 4	神奈川県農業技術センター 三浦半島地区事務所 研究課長
根本文宏	H22. 4	福島県農林水産部 農業振興課 主任主査	山岸菜穂	H22. 4	長野県野菜花き試験場 技師
堀越紀夫	H22. 4	福島県農林水産部 農業振興課 研究技術室 主査	小木曾秀紀	H22. 4	長野県野菜花き試験場 研究員
尾形 正	H22. 4	福島県県北農林事務所 伊達農業普及所 次長	川上暢喜	H22. 4	長野県野菜花き試験場 技師
林 宣夫	H21. 3	[退職]群馬県 農政部長	岩波靖彦	H22. 4	長野県南信農業試験場 主任研究員
剣持伊佐男	H21. 4	群馬県農政部 技術支援課 次長			
富田恭範	H22. 4	茨城県病害虫防除所 発生予察課長			



- 加藤公彦 H22. 4 静岡県経済産業部 振興局  
研究調整課 研究調整班  
班長
- 影山智津子 H22. 4 静岡県農林技術研究所 植物  
保護科 科長
- 西島卓也 H22. 4 静岡県農林技術研究所 伊豆  
農業研究センターわさび科  
上席研究員
- 田中弘太 H22. 4 静岡県農林技術研究所 伊豆  
農業研究センターわさび科  
研究員
- 石井香奈子 H22. 4 静岡県農林技術研究所 果樹  
研究センター生産環境科 主  
任研究員
- 土井 誠 H22. 4 静岡県農林技術研究所 企画  
調整部 主査
- 芳賀 一 H22. 4 静岡県病害虫防除所 上席研  
究員
- 森川千春 H22. 4 石川県農業総合研究センター  
総合研究部 病害虫防除室
- 佐藤陽子 H21. 4 福井県坂井農林総合事務所  
主任
- 古河 衛 H21. 4 福井県農林水産部 食の安全  
安心課 課長
- 宮崎暁喜 H22. 4 岐阜県農業技術センター 生  
物機能研究部 主任研究員
- 深谷雅博 H22. 3 [退職]愛知県農業総合試験場  
東三河農業研究所 所長
- 橋本典久 H22. 5 京都府病害虫防除所 主任研  
究員
- 福永晃士 H22. 5 京都府中丹東農業改良普及セ  
ンター 副主査
- 木村重光 H22. 5 京都府農林水産技術センター  
農林センター 環境部 副主査
- 岡山健夫 H22. 4 奈良県農業総合センター  
所長
- 増田吉彦 H22. 4 和歌山県農林水産部 農業生  
産局 果樹園芸課 農業環境  
保全室鳥獣対策班 (班長)
- 渡辺博幸 H22. 4 鳥取県農林総合研究所 企画  
総務部 技術普及室長
- 岡山県組織名称の変更  
〈旧〉岡山県農業総合センター農業試験場から、  
〈新〉岡山県農林水産総合センター農業研究所へ
- 角田佳則 H22. 4 山口県長門農林事務所 農業  
部 主幹
- 吉岡陸人 H22. 4 山口県農林総合技術センター  
専門研究員
- 幸坂有規 H22. 4 山口県農林総合技術センター  
臨時職員
- 米本謙悟 H22. 4 徳島県立農林水産総合技術支  
援センター 農業研究所病害  
虫担当 科長
- 楠 幹生 H22. 4 香川県農政水産部 農業試験  
場 病害虫防除所 主席研究  
員
- 三好孝典 H22. 4 愛媛県東予地方局 産業経済  
部 今治支局 産地育成室  
主席普及指導員
- 奈尾雅浩 H22. 4 愛媛県農林水産研究所 農業  
研究部病理昆虫室 (病害虫防  
除所) 担当係長
- 松崎正文 H21. 3 [退職]佐賀県農業技術防除セ  
ンター 所長  
H21. 5 (株)日本農業
- 山口純一郎 H21. 4 佐賀県農業技術防除センター  
防除部 部長
- 稲田 稔 H21. 4 佐賀県農業試験研究センター  
病害虫農薬研究担当 係長
- 加藤徳弘 H22. 4 大分県農林水産研究指導セン  
ター 農業研究部病害虫チー  
ム 主幹研究員 (チームリー  
ダー)
- 吉松英明 H22. 4 大分県農林水産研究指導セン  
ター 農業研究部 企画指導  
担当主幹研究員
- 後藤英世 H22. 4 大分県農林水産研究指導セン  
ター 農業研究部 病害虫チー  
ム主幹研究員
- 大分県組織名称の変更 (植物病理学会員の所属する  
組織名のみ)  
〈旧〉大分県農林水産研究センター安全農業研究  
所から、〈新〉大分県農林水産研究指導センター  
農業研究部病害虫チームへ  
〈旧〉大分県農林水産研究センターきのこ研究所  
から、〈新〉大分県農林水産研究指導センター林  
業研究部きのこグループへ

- 田村逸美 H22. 3 [退職]宮崎県東臼杵農林振興局次長(南部普及担当)兼 東臼杵南部農業改良普及センター所長
- 久野公子 H22. 4 宮崎県北諸県農業改良普及センター
- 鳥越博明 H22. 4 鹿児島県農業開発総合センター果樹部長
- 和泉勝一 H22. 3 [退職]鹿児島県経済連 肥料農業課  
H22. 4 北興化学株式会社 技術顧問

((独)農研機構 九州沖縄農業研究センター 赤かび病研究チーム)

- 埋橋志穂美 H21. 3 筑波大学生命環境科学研究科博士(農学) *Phylogeny and taxonomy of the genus Pythium*
- 平野泰志 H21. 9 東京農工大学大学院連合農学研究科 博士(農学) *Molecular phylogeny and PCR-based differentiation of the pathogenic types of *Fusarium oxysporum* in tomato* (埼玉県農林総合研究センター 病害虫防除技術担当)

## 2. 学位取得者(課程博士・論文博士)

- 工藤亮子 H22. 3 北海道大学大学院農学院博士(農学) イネいもち病菌のDNA組み換え修復遺伝子 *Rhm54* の解析
- 菅原 敬 H21. 9 岩手大学連合農学研究科博士(農学) 山形県における花き菌類病害の診断・同定と減化学薬剤防除に関する研究(山形県酒田農業技術普及課)
- 猫塚修一 H22. 3 岩手大学連合農学研究科(弘前大学) 博士(農学) リンドウ褐斑病の病原菌, 発生生態および防除法に関する研究(岩手県農業研究センター環境部 病理昆虫研究室)
- 伊藤陽子 H22. 3 岩手大学連合農学研究科(川口) 博士(農学) ホップ矮化ウイロイドの多様性と宿主適応に関する研究
- 西尾善太 H21. 6 東京大学大学院農学生命科学研究科 博士(農学) コムギ雪腐黒色小粒菌核病菌, コムギ赤かび病菌およびコムギ縮萎ウイルスの抵抗性に関する研究((独)農研機構 北海道農業研究センター畑作研究部 麦育種研究室)
- 吉田めぐみ H22. 3 東京大学大学院農学生命科学研究科 博士(農学) オオムギ赤かび病の品種抵抗性および防除適期に関する研究

- Le Minh Tuong H22. 3 東京農工大学大学院連合農学研究科 博士(農学) *Population dynamics and pathogenic races of rice blast fungus, *Magnaporthe oryzae*, at Mekong Delta in Vietnam*
- 富田恭範 H22. 3 東京農工大学大学院連合農学研究科生物生産科学専攻(茨城大学) 博士(農学) 茨城県におけるナシ黒星病の発病および防除に関する研究(茨城県農業総合センター 園芸研究所 病虫研究室)
- 草島美幸 H22. 3 東京農工大学大学院連合農学研究科(茨城大学) 博士(農学) 植物の全身獲得抵抗性に対する環境条件の影響
- Md. Rashidul Islam H20. 9 岐阜大学大学院連合農学研究科(静岡大学) 博士(農学) *Regulatory mechanisms of pathogenicity-related genes in *Xanthomonas oryzae* pv. *oryzae**
- 木戸一孝 H22. 3 静岡大学創造科学技術大学院博士(農学) 植物病原細菌 *Pantoea ananatis* に関する研究
- 渡辺秀樹 H22. 3 岐阜大学大学院連合農学研究科 博士(農学) *Pythium* および *Phytophthora* 属菌による花き病害の総合診断に関する研究(岐阜県農業技術センター 環境部)

- 堀之内勇人 H22. 3 岐阜大学大学院連合農学研究科 博士（農学） Biological control of *Fusarium* diseases of tomato and spinach by plant growth promoting fungus, *Fusarium equiseti* (岐阜県農業技術センター 環境部)
- 岩川弘宙 H22. 3 京都大学農学研究科 博士（農学） ダイアンソウイルスの翻訳と RNA 複製機構
- 杉本琢真 H22. 3 京都大学大学院農学研究科 博士（農学） 抵抗性遺伝子及び無機元素を利用したダイズ茎疫病の発病抑制に関する研究（兵庫県立農林水産技術総合センター 農産園芸部）
- 田中茂幸 H21. 9 京都府立大学農学研究科 博士（農学） Molecular biological studies on host plant basal resistance against plant fungal pathogens *Colletotrichum orbiculare* and *Magnaporthe grisea*
- 坂口 歩 H22. 3 京都府立大学農学研究科 博士（農学） Cellular and molecular biological studies on pathogenesis related morphogenesis in *Colletotrichum orbiculare*
- 木村重光 H22. 3 京都府立大学農学研究科 博士（農学） ダイズに病原性を有する植物病原酵母のカムムシによる媒介とその様相に関する研究（京都府農林水産技術センター 農林センター 環境部）
- 長岡栄子 H21.12 大阪府立大学生命環境科学研究科（博士応用生命科学） グラジオラスモザイク病防除に向けた弱毒ウイルス株の開発と実用化（（独）農研機構 中央農業総合研究センター 生物的病害制御研究チーム）
- Nguyen Thi Thanh Nga H21. 9 神戸大学大学院自然科学研究科 博士（学術） いもち病菌のさまざまな病原型に対するコムギとオオムギの抵抗性の遺伝解析
- 村田聡樹 H22. 3 神戸大学大学院農学研究科 博士（農学） 転移因子に対するイネ科植物いもち病菌のゲノム防御機構
- 内橋幸平 H22. 3 神戸大学大学院自然科学研究科 博士（農学） 冠さび病菌感染エンバク葉における防御応答の細胞学的解析
- 井上加奈子 H21. 3 神戸大学大学院自然科学研究科 博士（農学） 植物病原糸状菌の宿主接着に関する細胞学・生化学・分子生物学的解析
- 玄 康洙 H21. 3 神戸大学大学院自然科学研究科 博士（農学） ナシ黒斑病菌の感染器官に関する細胞学・分子生物学的解析
- 江草真由美 H21. 3 鳥取大学大学院連合農学研究科 博士（農学） 植物病原菌 *Alternaria alternata* の感染に対する宿主植物の誘導抵抗性機構
- 赤木靖典 H22. 3 鳥取大学大学院連合農学研究科 博士（農学） トマトアルターナリア茎枯病菌における病原性の進化と多様性形成の分子機構に関する研究
- 陳 輝 H22. 3 愛媛大学大学院連合農学研究科 博士（農学） Molecular biological studies on rice genes involved in RNA silencing: *OsRecQ1* and *OsRDR1*
- 井手洋一 H22. 3 九州大学大学院生物資源環境科学府 博士（農学） 果樹における病害制御の効率化を目的としたエビデンスの集積に関する研究（佐賀県果樹試験場）
- 山崎修一 H22. 3 九州大学大学院生物資源環境科学府 博士（農学） サツマイモに感染するウイルスの特性解明とその弱毒ウイルスによる防除技術の開発（大分県農林水産研究センター 農業研究部）

**【学会ニュース編集委員コーナー】**

本会ニュースは身近な関連情報を気軽に交換することを趣旨として発行されております。会員の各種出版物のご紹介、書評、会員の動静、学会運営に対するご意見、会員の関連学会における受賞、プロジェクトの紹介などの情報をお寄せいただきたくお願いします。

投稿宛先：〒170-8484 東京都豊島区駒込 1-43-11

日本植物防疫協会ビル内

学会ニュース編集委員会

FAX：03-3943-6086

または下記学会ニュース編集委員へ：

加来久敏、桑田 茂、畔上耕児、植草秀敏、佐藤 衛  
各委員宛

---

**編集後記**

学会ニュース第51号をお届けします。本号ではいろいろな記事が満載です。先ず今年度選ばれた名誉会員と永年会員方々からのご経歴とメッセージを掲載しています。新名誉・永年会員の方々の長年にわたる学会へのご貢献に対し心から感謝いたすとともに、国内外での幅広いご活躍に敬意を表したいと思います。次に学会活動報告が続きます。今年度の大会は京都国際会館で開催されましたが、久々の古都京都での開催で参加者数が900名を越し、演題数も413題、そして昨年に引き続き課題別シンポジウムの開催やポスターセッションなど、盛会裏に終了いたしました。京都大学、京都府立大学及び滋賀県立大学の先生方、また近畿地域の運営関係者の皆様、大変お疲れさまでした。大会に関連して学生優秀発表賞に選ばれた方も本号に掲載しております。この大会のほか、大会の前後に開催されました研究会いずれも盛況で、活発な活動が継続しており、同慶の至りです。それから、会員の動静が続きます。今春も沢山の方々の異動がありました。退職された皆様長い間お疲れ様でした。新しい職場に入られた方、異動された方、大いなるご活躍を祈念しております。また、学位を取得された方々、どうもおめでとうございます。本会ニュースは身近な情報も気軽に交換することをモットーにしておりますが、毎号ルーティンのパターンになりがちですので、皆様の周りのニュースなど活発なご投稿を期待しております。

(加来久敏)

---